

## ■（２６６）オウム真理教事件で取材記者としての悔い

教祖の麻原彰晃らオウム真理教の幹部７人の死刑が執行されました。地下鉄サリン事件などの取材で奔走した記者の１人としては、彼らの罪を思い起こすと、今も胸の鼓動が速まります。一つの区切りですが、教祖が何も語らないままの幕引きはやはり許せません。

悔いているのは坂本弁護士一家殺害事件の取材です。オウム真理教の被害者対策に取り組んだ弁護士の一家３人が自宅アパートからこつぜんと姿を消しました。「失踪」と扱われましたが、拉致を疑う仲間の弁護士や家族は、各地で救出を呼びかける集会や署名活動を続けました。発生から数年後、私の担当していた東京・八王子の街頭でも署名活動がありました。だが、何年も動きがなくてニュースとしては扱いにくいと記事にしませんでした。だが、裏でオウム真理教は凶悪化していました。間もなく松本サリン事件や地下鉄サリン事件を起こします。弁護士一家もアパートで殺害して遺体を捨てていました。

あの時、私が記事にしても無力だったでしょう。でも、弁護士の家族や仲間の必死な訴えに反応しなかった感覚の鈍さは痛恨の極みです。この反省は絶対に忘れません。（山）